JAAF
Japan Association of Athletics Federations

# 陸ジョブナビ

Riku JOB Navi

## ～陸上競技を支えるプロフェッショナルを徹底紹介！～

陸上競技の大会はたくさんの縁の下の力持ちによって支えられています。2022年１月号から連載してきた陸ジョブナビは今回が最終回！ ラストを飾るのは〝審判の審判〟とも言われる「ＪＴＯ（Japan Technical Officials」についてです。日本選手権をはじめ各種全国大会でサポートする青柳智之さんにお話を聞きました。 **文・M高史**

## スムーズな大会運営を実現!! 〝審判の審判〟JTOのお仕事紹介

最終回 **ＪＴＯ**



### 青柳智之さん

中学１年から陸上部に所属し、大学２年時に審判員資格を取得。大学院修了後、地元・長野で教員として小・中学校に勤務している。36歳でＪＴＯ（Japan Technical Officials：日本陸連技術委員）に合格（当時、最年少合格）し、日本選手権、国体、インターハイ、全中などの大会支援に従事。現在、日本陸連競技運営委員会幹事、長野陸協常務理事（競技運営担当）。東京オリンピック・パラリンピックでは、スターター主任を務めた。ちなみに、全日本スキー連盟（SAJ）の準指導員の資格も有している。

### JTOとは？ JTOになるには？

青柳智之さんは中学校から陸上部に所属し、高校、大学と110m、400mの両ハードルを専門に競技を続けていました。そこから、審判を務める経緯を話してくれました。

「大学１年の時に膝の半月板のケガをして、その時点で競技からは一度退きました。そんな時に、お世話になった先生方から『ちょっと審判を手伝わないか？』と声をかけていただき、大学の時に審判員資格を取ったのです。ですから、審判歴は大学２年生だった19歳から。今は46歳なので、もう25年以上になりますね」

その後、大学院を経て地元の長野で教員を務めながら、審判員としてのキャリアを積み重ねています。そして、36歳だった2013年に、当時最年少でＪＴＯ（Japan Technical Officials：日本陸連技術委員）試験に合格しました。でも、そもそも「ＪＴＯ」とはどんなお仕事なのでしょうか。

「元々、オリンピックや世界選手権などの国際大会で、審判のジャッジでトラブルがないように対応する『ＩＴＯ（International Technical Officials：国際技術委員）』と言われる役割がありました。その日本版として作られたのがＪＴＯです。大会がルール通りに、スムーズに、トラブルなく進行できるように、そして万が一トラブルが起きたとしてもトラブルを最小限にして進行できるように審判長を補佐する役目です。日本陸連主催大会や共催大会、日本グランプリシリーズ、ＪＭＣシリーズなど大規模な大会で現場の審判をサポートしています」

ＪＴＯ資格を持つ審判員は現在、日本では55人。どうしたらＪＴＯになることができるのでしょうか。

「ＪＴＯになるためには試験を受ける必要があります。何年かに一度、日本陸連でＪＴＯ試験が実施され、地域陸協から推薦されると試験を受けることができます。陸上競技の審判はＣ級から始まり、それぞれ一定の基準を満たすことでＢ級、Ａ級、Ｓ級へと昇格します。Ａ級の資格を取らないとＪＴＯの受講資格を得られません。また、審判や審判長を補佐する役目なので、各競技会で主任や総務の経験を積んでいることも必要です。

関東や東北といった各地区のブロックから２人ずつＪＴＯ候補者として推薦され、そのメンバーがＪＴＯ養成講習というセミナーを受けます。その後に試験を受けて合格し、日本陸連の理事会で承認されると晴れてＪＴＯのメンバーになることができます。セミナーは２日間しかありませんが、それまでに経験をしてきた審判の業務やルールの知識などが大事になるので、講習会の２日間はそれまでやってきたことの確認といった感じですね」

知識と経験を積んだ人が試験を経て、合格すると、晴れてＪＴＯのメンバーになれるんですね！

### 年間スケジュールや1日の流れ

日本選手権やインターハイ、国体などの陸上競技場で行われるトラック＆フィールドの競技会から、室内競技会、マラソン、駅伝、競歩などのロードレースまで多岐にわたります。

ＪＴＯとして派遣される大会での１日はどんな流れになるのでしょうか。「大会によってスケジュールも変わりますが……」と前置きをしながら、「最も過酷」だというインターハイを例に聞きました。

「インターハイは真夏に５日間にわたって活動するので、ＪＴＯの中でも最も過酷な大会です。前日の監督会議から参加するので、派遣期間もほぼ１週間と長いです。開催地にもよりますが、大会期間中は朝６時半過ぎにはホテルを出発。朝食を競技場で摂って、７時15分から７時半ごろには審判の主任会議に参加し、準備を進めます。現地の審判員と一緒に、トラック種目や跳躍種目、投てき種目など担当が現場で分担されます。競技が同時に行われるので、昼食は途中で相談しながら、空き時間で。インターハイは夜も遅く、競技終了が20時頃になる日もあるので、ホテルに戻ったら食事、洗濯をして次の日に備えます」

ＪＴＯはどの大会でも、常に冷静な判断が求められます。

「どの大会も選手にとっては重要ですが、特にインターハイでは、その結果によって将来がかかってくる選手がいます。また、監督やチーム関係者が熱くなることもあります。それでも、どんな時でも審判長とルールブックを見せながら対応し、抗議の場合は動画を見せながら『『こういうジャッジをしました』と冷静に、事実をお伝えするように心掛けています。大会が終わった時はいつもホッとした気持ちと達成感を感じます。大会をやっている間は緊張感とアドレナリンが出ているのか疲れないのですが、大会が終わった次の日はぐったりしています（笑）」

▲競技会を支える審判の方々。前列右から4人目が青柳さん

### 陸上が好き！審判が好き！

ＪＴＯの方々のほとんどは、普段は仕事をしながら、休日や有給休暇などを利用して活動しています。

「私は小学校の教員をやっています。インターハイはちょうど夏休み期間ですが、国体の時期は仕事の調整をして活動していますね」

ＪＴＯのやりがいについて、「基本的に、私は陸上が好き、審判が好きなのです。競技場にいられるのが幸せ。みんなが幸せに感じるような大会を作り上げていくことに、やりがいを感じますね」と青柳さん。これからの目標については、次のように話します。

「日本でいつでも質の高い競技会を提供できることです。主役はもちろん選手ですが、運営スタッフの力で少しでも選手のみなさんのパフォーマンス向上に貢献できたらいいなと思っています。選手のみなさんに伝えたいことは『ある程度、ルールを知ってほしい』ということ。例えば、跳躍などの待ち時間や抗議の方法などですね。ルールを知っていることは、自分を守ることにもつながります」

また、ＪＴＯとして11シーズン目を迎える青柳さんは、〝世界〟にも目を向けています。「WA（世界陸連）でもゴールドレフェリー、シルバーレフェリー、ブロンズレフェリーという審判資格があります。国際審判の資格を持つことで、国際大会や海外の大会にも派遣されるようになってきます。ＪＴＯでも挑戦する道はいろいろありますし、若い方にも地元の大会でまずは挑戦してもらえたらいいかなと思います」

陸上競技が大好き、審判が大好きという青柳さんは、これからも〝現状打破〟し続けます！


MARATHON GRAND CHAMPIONSHIP FINAL CHALLENGE

**MGCファイナルチャレンジ**

パリオリンピックマラソン日本代表 残り１枠は誰の手に!?

https://www.mgc42195.jp/mgc/final-challenge.html

**大阪マラソン2024**
＜開催日＞
2024年２月25日（日）
＜開催場所＞
大阪城公園
（フィニッシュ）
▼大会ページはこちら
https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1812/

**東京マラソン2024**
＜開催日＞
2024年３月３日（日）
＜開催場所＞
東京都庁
（スタート）
▼大会ページはこちら
https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1818/

**名古屋ウィメンズマラソン2024**
＜開催日＞
2024年３月10日（日）
＜開催場所＞
バンテリンドーム ナゴヤ
（フィニッシュ）
▼大会ページはこちら
https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1821/

**JAAF大会 Info**

**第107回日本陸上競技選手権大会・20km競歩 兼U23・2024パリ五輪競技大会 日本代表選手選考競歩会**

＜開催日＞
2024年２月18日（日）
＜開催場所＞
六甲アイランド
甲南大学西側 20kmコース
▼大会ページはこちら
https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1803/